

文學概論序

尤も多く誤解せられ、又屢濫用せらるゝものは文學なり、文學の目的は畢竟、かの古希臘の哲學者が悲劇に就て云へりしか如く、心身の清淨にあり、今や文運漸く開かれしと雖、猶ほ之に對して正當なる見解を有する者少く、其の濫用せらるゝ事又甚しとす、文學普及會は爰に見る處あり、真正なる文學を紹介し、醇正なる趣味を普及せしめんとす、則ち其第一着として、公にしたるものは此一篇なり、

夫文學美術の事、言ふに易くして、論ざるに難し、本書題して文學概論と云ふ、敢て抱負を述べて、世に問はんとするにあらず、はた精細緻密の評論に入るにあらず、たゞ嘗て思ひし事、今考へつゝある事を記して、こゝに一冊子となしたるのみ、識淺く學足らず、加ふるに文辭の拙なるを以てす、或は讀者の望に適ふ能はざらんを恐る、幸にしきまた少しく世を利する事を得ば、著者の喜びこれに如きるなり、

著者しるす

文學概論目錄

- 第一章 思想の活動.....
- 第二章 文學の本領.....
- 第三章 古今文學の比較.....
- 第四章 東西思想の比較.....
- 第五章 近代の歐洲文學.....
- 第六章 日本文學の特質.....

一七

第一編 文學概論

第一章

思想の活動

思想の活動は文學の源泉なり、この源泉或は激動として矯激の文學となり。或は靜平にして沈靜の文學となる。今文學の一斑を論ずるに當りて、先づ吾人をしてゝに思想の活動と矯激の文學とに就て説く處おらしめよ。

宇宙萬有に亘りて一の靈氣あり。人間心理の奥深き處に一の精氣あり。彼を呼んで造化と云ひ神と云ひ。此名を名けて精神と云ひ。靈魂と云ふ。而して此の兩者を併せて之を生命と云ひ精神と云ふ。

此の生命や發して萬衆の櫻となり。凝つて不朽の詩歌となる。其の社會に顯るゝや革命となり。個人に顯れてはバイロニズムとなる。萬象之に依りて動き。天地之がために活く。彼の鳥の歌ひ花の開くは之れがためなり。彼の人の笑ひ人の泣くも亦之れが爲めのみ。其の活動するや之を止むるに由なく。其の進むや澎湃として大濤の如し。智識の指揮は其の顧る所にあらず。意志の抑壓は能く其の止むる處にあらず。夫れ智識や意志や死物のみ。彼等此の生命の進歩のために設けられたるものなれば其の用や暫時のみにして。忽ち却て彼の進歩を妨ぐるものとなる。昨日の是は今日の非なり。今日の是亦明日の可なるやを知る能はず。然れども

彼の精氣と云ひ生命と云ふものいたへず這般の繩墨と秩序とを打破して進むなり。故に世は時々に進歩し刻々に發達して止む時なく。一代は前代より自由は。一人は他人より羈絆を少くし。人間の終極宇宙の最後に達せんとす。夫れ人間の終極宇宙の最後とは此の生命が自由に濶歩翱翔するの境を云ふ。此の境は即ち所謂黃金時代と呼ばれたるものなり。

バイロン矯激して曰く「世は枯草の一束。人はそを牽く駒なり」と英國の某教授冷靜なる眼光に哲理を説て曰く「凡ての信條と系統とは哲學と宗教とを生かすために死せざるべからず」と世はまことに果敢なきものなり。枯れ草の一束にだも及ばざるものあり。

人は蠢々として動き。空々として働く。彼の爲す處此の宇宙の活動に向て何の爲す處のらん。只夫れ實に斯くの如く愚なり故に繩墨を要し秩序を要し羈絆につながらるゝを要するなり。此れ世俗が依て以て進むの唯一の道あり。若し現世を以て實にこゝに止まらしめば此は決して靈性あるものゝ永く留まるべき處にあらざるなり。あらず世の決して永く此の繩墨と秩序とに縛せらるゝものにあらざるなり。何とあれば生命は此處にあり精氣此處に宿ればなり。此の生命は活動せり。たへず彼の理想に向て進めり。此に於てか現世は味なきものにあらず。花なき荒野にあらず。又枯草の一束の空々漠々たるのみにあらざるなり。人間の眞價は此生命の

活動にあり。彼の繩墨と秩序とに在るにあらざるなり。左れば系統と信條とは到底破れざるべからざるものなり。想ふに人間の歴史は建設と破壊との歴史なり。プレトリーの哲學はアリストートルの破る處なり。カントの哲學はヘーゲルの取らざる處にしてヘーゲルの哲學は又シヨーマンハウエルの好まざる處なり。一系統の立つや他の系統を破り。破りて建て建ては破る。夫の猶太教は基督教の破る處。基督舊教は新教の破る處にして基督新教又果して其の運命の如何を知る能はざるなり。一個の信條他の信條に代りて立ち。新陳代謝して極る處を知らず。而して思想をして常に斯くあらしむるもの一に彼の宇宙と人心とに溢れたる生命に歸せざ

るを得ず。夫の生命と云ふものは斯くの如く自由の天地に呼吸せんと活動する者なり。一陣の暴風ありて静平來り静平の後に暴風あり。之を時勢に徴するも亦彼の生命の活動を見るべし。王朝幾年の泰平に次で戦亂相續ぎ。徳川氏十五世の静平ありて維新の革命迫る。歐野十數世紀の静平は空前絶後の思想革新時期を産し。爾來の平和は又十九世の劈頭に佛國革命主義を全歐に溢れしめたり。彼の伊太利の野にアンゼロ。ラファエルを出し。獨乙の森林にルーテルを産し。英國の孤島に沙翁。マローを生みたるもの豈に偶然ならんや。夫れラルテール。ルソ一の徒か自由主義を稱導するの時歐洲の意氣既に動けり氣運は既に熱せ

り。彼の社會と人心との生命は必ず發せざるを得ざりしかり。此に於てか終に革命を生めり。凡そ物の活動するや暫時にして止み静平永く續て再び活動あり。活動は常に一大段落を爲しつゝ進む恰も竹の節ある如くなり。一つの静平より他の静平に遷らんとするに狂亂を要す。狂亂とは即ち精氣生命の大に動くに外ならず。只夫れ大に動くが故に革命の際やバイロニズムを起す。この時かの生命は盲目的に放出す。故に屢々必要なる法規をさへ破り去て顧みざるに至る。既に狂亂を以て生命の活動に歸す。何ぞ必しも静平を貴ばん。何ぞ必しも狂亂を厭はん。これ寧ろ進歩の六段落を爲すの要關と云ふべし。何ぞ猥りに泰平を喜ばん。何ぞ輕しく革

八
命を恐れん。余は革命時代を以て異常となし變調と云ひ。泰平時
代を以て通常となし平坦と云ふ。嗚呼彼の狂熱ある狂亂の文學實
にかゝる革命の際に起る。

春山は萌るが如くにして其實は眠れり。秋水は静かなるが如く
して其の内激せり。世には健全と不健全とを云ひ。甚しく不健全
を恐るゝものあり。愚なりと云ふべし。靜平は春の如くにして狂
亂は秋の如し。大山名川に跡を潜むるもの躁亂狂暴にして秩序を
亂すものは共に此の秋なり。西行の如きバイロンの如き然り。憐
れむべし法規の世は彼等を容るゝ能はず不健全として蛇蝎視され
たり。事業赫々光彩陸離四面風を生ずるが如きは人の春なり。太

九
平時代の文士これなり。幸あるかな彼等は時好に投じ一代の愛兒
とされり。熟慮せよ。前者必ずしも朽ちたるにあらず後者必ずし
も生けるにあらず。前者は静かなるが如くにして激し。激せるが
如くにして静かなり。後者は萌るが如くにして眠れり盛なるが如
くにして死せり。世は何が故に前者を厭ふて後者を好むか。健全
と不健全と抑々何の別ぞや。これ抑々謂なきの差別なり。夫の社
會の生命に依りて泰平と革命との來るが如く。人心の生命は或は
沈んで静となり或は發して動く。故に活動に乗ずる活動の製作あ
り。靜平に進む靜平の製作あり。必ずしも何れを勝れりとし何れ
を劣れりとなすべからざるなり。此に於てか世の所謂大人と云ふ

一〇
ものを観察するに二あり。異常にして大なるものあり革命時代の
文士英雄これなり此を個人の變調となす。通常にして大なるもの
あり。泰平なる時代の文士英雄これなり。此れを以て個人の平調
となす。一は生命が一の系統と信條とを破らんとするの際に生ず
る大人にして。他は生命が全く系統と信條とを爲せるの時代を代
表して立てるものあり。一は不健全あり他は健全なり。生命は此
の二種の大人を生ず。何れを可とし何れを非とせん。健全と不健
全とは問ふ處にあらざるなり。

テイヌは其の文學史に於て這般の説をなし。此の精氣の妄進する
ものを以て狂となし。人の狂熱を以て其の性なりとす。思ふに世
の所謂大人にして夫の不健全なるものを觀るに。凡て此れ狂人に
類するものあり彼等は何が故に狂せるか。彼等の精氣生命は遠く
時代を破りて進めり。故に世を視る事枯草の一束の如く。當時の
状態が要する法規と繩墨とを破れり。彼等は時代に對しては偉大
に失したるなり。世俗は屢々夫の法規と繩墨とを守るものを以て
正と呼び之を破るものを以て狂と呼ぶあり。彼等が狂と呼ぶるは
素より然るべし、嗚呼夫れ狂と呼ばれ變と稱せらるゝもの實に
高く世俗に脱せるの故にあらずとせんや。試に乾燥せる道德眼を
去て虚心にして世の所謂狂氣ある大人を觀察せよ。彼等は屢々法を
破り人の道とすべき處を行かず。然れども彼等は其内に一種の靈

氣を有し其の所謂罪とすべきものに於て亦敬慕措く能はざるものを有す。此の靈妙なるもの敬慕置く能はざるもの即ち狂人的大人の内に藏せる生命にして。其の活動や時代の法と則とを破りしなり。法則や繩墨は一代のものなり。生命は永生のものあり。此れの生くるは彼れの滅ふるなり。文士の爲す處徃々斯くの如し。之を文學の變調と云ふ

今少しく問題を轉じ目を舉げて現時に於ける日本國の地位を考へ而して更にわが想界を察せよ。此の國民が永く史上に其の印跡を残すと否とは現時の傾向如何に存す。今は必らずしも健全を求むるの時にあらず。秩序を求めるの時にあらず。維新の革命は未だ以

て此の國民の大革命とするに足らず。大革命は現時此の想界に起らざるべからず。大革命は秩序より來るものにあらず。今は大に狂し大に狂ふべきの時なり。萬想渾沌として入り亂れ爰に新想の起り。生命の發し來り此の國民をして此の國民たらしむべきの時なり。大勢一轉の時なり平々凡々の時にあらず安心の時にあらずこの際に起るべき文學また一大狂熱の文學なるべし。今日人間に生命を與ふると自稱する基督教徒の如き何んぞ猥りに動物的文明と呼ばれたる米國流の繩墨教を捕へ來りて此の國に押し立て。以て得々たるか。吾人は基督教の先輩諸氏の猛省を乞はざるべからず

要するに、かの生命なるものは、時に驚天動地の飛躍を爲す。これを思想一轉の域となす。この際に生れたる英雄は革命的人物なり。其の文士は不健全あり。其の文學は即ち矯激の文學なり。吾人は斯くの如き不健全なる文士を排するの所以を知らず。斯くの如き矯激の文學を恐るゝの所以を解せず。共に進歩の道程に於て起るべき必然の要件たらずや。

第二章

文學の本領

營々として店頭に利を争ひ、孜孜として刀筆の務めを執る、人間の天分果してこゝに終るものならんには、人生素より空なるが如きのみ、こゝには宗教もなく、詩趣もなく、たゞ俗塵の飛動するあるのみ、然れども春風衣の袖を拂ふの時、芙蓉峯頭東海に聳ゆる處、吾人の感動さ、情激す、塵想こゝに入らず、忘念こゝに來らず、こゝに於てか始めて詩境あり、吾人はこゝに慰息を得るなり、然れども自然既に吾人にこの慰息を與ふ、人間また焉んぞ與ふものなからんや、然り人は更らに偉大なる造化が創造物なり、

吾人思を構へてこれを觀察する時、感來り情動きて、ふゝに至清
 至醇の詩境あるを認む、斯くてこゝに慰息を得るなり。抑も詩と
 は何ぞや、文學とは何ぞや、吾人は之れが定義を與ふるの至難な
 るを知る、たゞ答へて曰はん、この感、この情、この慰息則ちこ
 れなりと、然らば文學なるものは一つに娛樂の料なるか、消閑の
 具なるか。曰く一面は慥かに娛樂の料なり、消閑の具たり。然れ
 ども他に又其本領なるものなからんや。

哲學者曰く、文學詩歌は人間が生存に要する勢力の餘剰に出づ、
 生存の力足り、競争の力餘りありて、而して後ちに文學出づ、こ
 れを太古に徴するに、蠻人の近隣と戦て勝つや、盃を舉げ、樂を

奏して、これを祝す、これ即ち人間勢力の餘剰に出でしものなり。

これを今世に見るも、貨殖産業の道達して、而して後ちに、趣味の
 渴望來る。古今凡て一轍に出づと、これ素より然り、然らば文學詩
 歌は夫れ終に娛樂の用たるのみか、何んぞ必らずしも然らん。之れ
 を人間の性情に考ふるに、凡そ吾人は必らず快樂を要するものあり。
 慰息を求めんとするものなり、こゝに於てか實に文學詩歌あり、文
 學詩歌は吾人に慰息を與へ、且つ吾人が心をして清淨ならしむ。夫
 れ、吾人はかの勢力の餘剰あるに於て、生存競争の間に立ちて、吾
 人の心をして高潔ならしめ、吾人の心をして深遠ならしめざるべか
 らず、この時に於て吾人をして理想の境に遊ばしめざるべからず。

然れども營々とし孜々として業務に従ふの時、吾人が心はかの理想の天地に去る能はざるなり。幸にして人に慰息を求むるの性情あり、この性情を以て、かの勢力餘剰の際に用ひ、この間に於て人をして其の理想を肆まにせしむる事を得べし。文學は則ちこの勢力の餘剰より出で、人の情性に満足を與へ、併せて吾人の心をして理想の境に至らしむるものなり。故に曰く、文學は一面娛樂の具にして、他の一面はこの本領を備へたりと、文學の位置夫れ然り、故に屢々全然娛樂の用に供せられ、文士また自から知らずして彼の蠻人の舞樂して樂むと一班あるに至り、甚しきは舞妓の輩と異なるなきに至る。見よわが徳川時代文士の一部が、社會の擯斥を受けし事の幾何なり

しかを彼等は戯作者と呼ばれ、戯の一字を冠せられたり。當時儒教の弊、人心に一種の性僻を與へ、其の審美眼をして鈍からしめしものありしと雖も、文士自から文學を瀆したるの責は免るべからず。暫らく思へ、文學の任は單に人心に慰息を與ふるにありて、而も其の責甚だ輕きにあらず。娛樂の用たると其の本領と天地の差ありて、而も其の分るゝ處、間髪を入れざるなり。吾人屢其區別を曖昧にすと雖も、之れはた截然たる區劃を要す。一つは天の境にあり、一つは地の下にありと云ふべし。

吾人は今こゝに文學詩歌を以て、一定の目的ある教訓的のものゝ如くに説けり。然れどもこれたゞ其の終極を云ひたるのみ、文學素よ

り他の羈絆を超越し、社會と制裁とに獨立して成れるものならざるべからず。文士、讀者共に、其の思想の根底に於て大なる理想を有すべし、終極の目的を有すべし、文學果して斯くの如くならば、其の現實の目的、目前の實用の如きはまた問ふを要せざるなり。

春光麗かなる日、書窓靜かに希臘の古典を繙け、心醇酒に酔へるが如く、陶然として忘我の境に入り、まことに地上の樂を味ふべし。

これ則ち文學終極の目的なり。讀者試みに繪畫彫刻に對へ、其の典雅清淑の趣は、自から吾人に慰息を與ふるものあり。又試みに音樂に耳を傾けよ、其の緩急相ひ和する諧音は、不知不識の間に吾人をして落涙せしむるものあり。吾人はこの時に於て沈靜の境に入る。

この沈靜の境はやがて夫の理想の天地に導くものなり、詩の極致、美術の終極實にこゝにあるなり。吾人は特にこの種の文學を希臘羅馬の古典に見る。大なるかな詩の徳や。古詩仙が遺墨、幾千年の今日、處を異にして猶ほ吾人其の餘澤に濡ふ事を得たり。然れども今吾人はこの典雅清淑の文學を稱賛すると共に、一言せざるべからざるものあり。曰く、文學美術の目的なり。吾人はもとより前段述べしが如く、美術文學を以て獨立せるものとなす、則ちこれに直接の目的なきものにあらず、果して然らば、彼の佛蘭西に起りし一派の美術、美術のための美術 *art for art* なるものはまた其の旨を得たるものが。吾人は未だ能くこれを明快に論定すること能はずと雖も、

この問題たるや、また大ひに文學と宗教及び道德とに關係あるもの
たれば、今こゝにこれを一言せん。

試みに沙翁が戯曲數篇を取り、通讀し去つて清思一考せよ。吾人は
何者か天地の樞機に接したるの思あるへし。沙翁果して吾人に教へ
んとする處あるか、吾人これを知らず。蓋し彼れは始めより教訓的
の心を持つて其の戯曲を創りしにはあらざるべし。然れども吾人は
かれの作に於て教を享くる處大なり。凡そ小説若しくは戯曲の名什
に於ては、吾人素より宗教上及び道德上の命令的教訓に接する事な
し、然れども道德的精神は、猶ほ其の中心にありて、吾人に教へ吾
人に感銘を與ふ。夫れ宗教は命令的なり、教導的なり。文學美術に於

ける道義はたゞ感銘を與ふるに止る。然れども若し文學美術に於て、
其の道義的觀念なからんか、夫れは最大なる文學美術と稱すべから
ざるなり、夫れ宇宙は一大道義的存在を示す。精神のある處、人間
の生息する處、道義は其の根蒂の要義たり。文學美術はこの人生を
表示する一小天地なり。宇宙に道義あり、人に道義あり。これを表
示する文學美術また道義なかるべからざるなり。たゞ其の宗教と異
なる處は其の命令的教導的なると否とにあり。思ふにこの道義的觀
念の一篇の著作を輕重する事眞に少々ならず。素より文學美術品階
の上に於ては、藝術的研究其の主たるべしと雖も、これを全体と
して觀察する時、必らずやかの道義的觀念を預め眼中に置かざるべ

からざるなり。

吾人は今道義的觀念と云へり。然れどもこれ狹義に曰ふ逐日的道德の謂にあらす、かの一種の習慣的時代の制裁及び法規の如きは、必ずしもこゝに言ふ處の道義にあらざるなり。宇宙の大法。人心最後の要求、これ廣義に言ふ處の道義たるのみ。若し夫れ彼の狹義なる道義に至りては、時に或は進んでこれを打破せざるべからざる事あり、文士美術家にして、若しかの俠義の道義を遵奉し、自から意識して教訓的に其の詩文の製作を試むるものあらば、これ甚だ賤劣見るに足らざるものなるのみ、ゲートは美術を害ふものを以て、警察と宗教とに歸せりと云ふ、則ちこの意義に於て宗教を解し

たるものなるべし。文士の心もどより深く宗教の素養なかるべからず、この心また必らず其の製作の上に著るべきものなる事、こゝに論ずるまでもなけれど、かの所謂時代を逐ふの道德と宗教とに至りては、恰も警察と等しきものにして、これに默從するの文學美術は、到底名品たるを得ざるなり、吾人は飽までこの種の道德宗教が文學美術に關涉するを防がざるべからず。抑も文學美術の獨立とは何の謂や。曰く、この種の羈絆を離れ、教訓的意識を去り、自由の思想を藝術の上に顯はすを云ふ。然れどもこの自由の思想が、宗教的道義的なるべきは勿論の事なり。こゝに於てか知る、夫の美術のための美術と云ふもの、また終に道義主義と矛盾する處なきを。

道義

吾人は餘りに岐路に入れり、今や返つて言ふ處あらしめよ。抑も沈静の文學とは、思想の静平ある時に於て出づるものあり。其の人心を樂ましむるや、則ち繪畫の如く音樂の如し、かのよろ／＼の古典の如きこれなり。美術文學の其のまことの旨を得たるものは、夫れ沈静の文學か、矯激の文學は變態なり、沈静の文學は則ち常態なり。

こゝに猶一言すべき事あり、吾人は前章に於て、文學に於ける健全不健全の區別を爲し、これに可否の斷定を下すの所以なきよしを説けり。世にはまた樂天と厭世との差別を立て、一つを擧げ他を貶するものあり。然り、世には樂天の文士あるべく、厭世の詩人あるべく、健全なるもの不健全なるものあるべし。然れども是非善惡の

斷定を加ふるは甚だ非なり。たゞ吾人は云はんとす、世の所謂大詩人、大文士あるものは、常にこの差別の境地を脱却せり。沙翁に厭世の觀念ありとするは非なり。ホーユルに樂天の想ありとするは可笑しからずや、而して沙翁を指して樂天家なりとするものあらば、いよく笑ふべきならずや。天地の究極、其の理想の知るべからざるが如くに、詩人文士が上に於ても、其の尤も高遠偉大なるものは、則ちちかの區別を脱し去りて、所謂衆理想を容れて餘りありと云ふの境地に到達す。この境地にあるもの此れを詩人の大なるもの、詩の醇なるものと云ふ。今沈静なる文學の一例として伊太利曠世の詩人ダンテが上を説かしめよ。かれは以て不健全なりと言は、頗る

不健全なり、はた健全なりとせば頗る健全なり。其の宗教上の制裁を遵奉し賞罰苟もせず、時のスコラスチックの教理に乖かざりしが如き、かれが衆多の詩人に異りて健全なる處なり。然れども其の時勢に慨し、憤然想界に趣きしが如き、はた地獄暗黒の境地を直寫して憚る處なかりしは、甚だ厭世的、不健全なりと云ふべし。かれは一面地獄を書いて地を呪ひしが如しと雖も、また淨火界を以て人世の姿に樂天の趣を示し、天堂に至りて其の大圓滿なる天地を表はし、以て終極の境地を示せり。或は其の神曲を以てかれが憤を漏したりとすものあれば、これ頗る誤れるの見なり。かれはもと詩人たるの意識こそ多からざりしかれ、また希臘羅典の古典を涉獵し、青

年の時より早く文事に心を傾け、戀人を失ひし時に夫の神曲を草さんと、の決意をなせしなり、況んやかれが伊太利語の韻律及び其の言語の上に、少なからざる苦心を爲せしは、たま／＼以てかれが文章に貢献する處あらんとせし、其の志望をも覗ふに足るをや。ダンテが新生命と云へる一書と、其の神曲とを讀みしものは、かれが如何に有識の人傑にして、深く藝術に潜心せしかを知るべし。然れども若し、かの神曲の一篇を以て彼れが單に美術のため作りしものとするものあれば、夫はまた甚だ淺薄なる觀察と云ふべし。かれには一種の意志ありき、宗教的命令的の意識はた少なからずかれが心を支配せり。かれには烈火の如き情熱あり、憤慨の氣あり。神曲の一

篇は到底單に美術の上の製作として見るべからず。當時の氣運とか
 れが境遇及び性情を知るものは、蓋し這般の消息を解せるならん。
 吾人はこの千古の大詩人に於て、宗教を美術に収め、健全と不健全
 とを合はせて、これを超脱し、厭世と樂天との外に立ちて、幽遠な
 る思想を歌ひたるを見る。若し吾人に向つて何人か大詩人たりやと
 問ふものあらば、吾人は進んでダンテを推さんのみ。其の地獄の卷
 フランチエスカの一節十數行、また以て世界の偉大詩人たるに足るべ
 しとは、これ外人の語る處たり

第二章

古今文學の比較

古の文學は今の文學に比して勇壯なり健全なり、わが日本の詩歌は
 悲痛哀感に富み、センチメンタルの傾あるものなりと雖も、古に
 溯りこれを古事記萬葉等に觀るに頗る其の趣を異にする處あり。左
 れば今日の新體詩を論ずるもの、例をこの古代の詩歌に取り、わが
 國語の必らずしも勇壯高大なる思想を吐露するに適せざるにあらず
 るよしを説く。こは今吾人が論ずべき限りにあらずと雖も、わが古
 代の文學が勇壯健全なりしは、これに依りても視ふを得べし。支那
 の文學に至りても然り、後代の詩文が多くは慷慨悲痛の文學に富み

たるに、其の大雅風騷幾篇自から健全に、所謂悲んで痛まず、樂んで淫せずと云へりしが如く、頗る其の調和を得たる趣あり。これを西歐の文學に徴するも然り。かの希臘の詩祖たるホーマルの詩を見よ、これを羅甸の詩人ヴァーヨルが「エニマス」に比べよ、更らに下りて最近の歐洲文學と對觀せよ。かれに於ては健全に淳朴なれども漸々時代と共に反省的に傾き、最近に至りては所謂不健全ある文學を出すに至れり。之れを要するに東西何れの文學を問はず、古に於ては凡て醇正なれども時代を追ふと共にやうやく煩悶を加へ來るこれ實に古代文學と近代文學との主要ある相異なり。吾人は何を以てこの相違を解釋せんか。今吾人をして少しく思ふ處を舒べしめよ

造化が創造せし自然は完全なり。少くとも人間の私情が製作せしものにして完全なり、吾人はこの自然の状態にあり、この自然に近親せる間に於ては、健全なり、神聖なり、純潔なり。天地山川の崇高なるに驚き、花鳥風月の優美なるを樂むは、これ豈に純潔神聖なる自然に接するが故にあらずや。これ將た造化と云ひ若しくは創造の上帝なるものに近づけるが故にあらずや。上帝が人類に與へし大書冊二あり曰く、一は西歐宗教の經典にして、他はかの自然界なりと、吾人は今この所説を討究する能はずと雖も自然の神に近づけばまた疑ひを容るべからざるなり。吾人はまた幼兒の頑是なく、無邪氣なるを愛す、吾人の幼兒に於て無限の趣味を見る、惡人と雖も幼

兒の笑ふには、心動かざるを得ずと、嗚呼これまた夫の幼兒の自然なるがためにあらずや、其の神の如く純潔なるがためにあらずや。然り彼れに於ては、邪念亦く惡意なく、其の動作は心の有りのまゝあり。吾人は直ちにこれを稱して神聖と稱すべし、斯くの如くにして天地山川と花鳥風月と幼兒とは實に神に近きものなり。果して然らば人類一班は如何、かれも亦た自然と同じく上帝の創造に出づるにあらずや。然りかれも其の自然なる點に於ては神聖なるものなり。天地山川に勝りて純美純潔なるものあり。不幸にして其の能力の發達と共にかれは屢々自然を離れ、上帝を離れて、其の純美と純潔とを失へり。故に吾人は古代に於て其能力の未だ發達せざりしに際し

て、其の有りのままなる自然の姿を見たりしなり。この時に於てかれは全く自然と共にありて、自からまた自然界の一存在物たりし。この時に於てかれは自由の天地を有せりき、かれは其の思ふ所を云ひ、考ふる處を行ひ、更らに修飾する處亦かりき。かくの如く自然にしてかれの心は天地山川と合一せりき、天地山川は即ちかれの兄にして花鳥風月は即ちかれの弟たりき。左ればかれに苦痛もなくかれに煩悶あらずりき、シルレルが所謂

While gods remained more human,

the men were more divine

と歌ひしはこの境なり、この時に當りてや、神は人の如く、人はま

た神の如く、この間今日の如き廣大なる籬壁を見ざりき。これ實に
古代文學の勇壯高大なる所以なり。見よ希臘初代の思想の如何に健
全にして、其の神の如くなりしかを。希臘人は神と近接せりき。か
れ青山を見れば彼處に神ありき、かれ谿流に菴めば彼處に女神あり
き。日輪を仰ぎ見る時彼處にアポロあり、かれ月宮を眺むる時、
彼處にダイアナあり、かれが見る所至る所に神あり、かれ自からず
ら神たりし時ありき。かれ既に斯くの如し、其の心豈に悲痛あらん
や。其の詞に顯れて文學となり詩歌となれるもの亦焉んぞ悲しみあ
らんや、憂あらんや、其の心の神の如くなると共に、其の文學も亦
清淨潔白、内に觀み外に恐るゝ處あければ其の聲も自から勇壯なら

ざるを得ず。今吾人は希臘思想の上をのみ云へりき、これ其の凡て
の詩歌的思想を代表せる國民なればなり。然れどもこは敢て希臘一
國に限れるにわらずして、吾が國上古の文學の如き素より亦これと
趣を同ふす、吾れにはかの希臘の如く天地山川と共に神々の飛躍す
るものなしと雖も、其の思想の健全純潔勇壯高大なるはまた異なる處
なし、われに於ても其の思想はもとより神々と親近せしなり。これ
を直接に神々と稱して明らかに顯したると然らざるとは、國民の性
情を異にしたるがためのみ必ずしも今深く問ふ處に非るなり、爰に
於てか吾人は見たり。古代文學の勇壯高大なるは其の自然に出づる
を以てなるを、而して其の自然なるは則ち上帝若しくは神々に近き

所以なるを。

然れども吾人々類は永く古代民族の如く單純簡朴の姿に止まる能はざるなり。吾人は常に進歩せり、進歩は必らず復雜と供あへり。今日の進歩はまた實に非常なる復雜を招けり。吾人は今一面たしかに自然に遠かれり、たしかに上帝と離れたり。故に今日の思想は昔日の如くに醇朴ある能はざるなり、吾人は今日山野に逍遙し、花木を愛玩すると雖も、古人の如く彼處に神を見る能はざるあり、必らずしも花を花として樂しみ、月を月として樂む能はざるなり。近代文士の思想は大抵これに一種のセンチメントを附加してこれを思ふ例へばわが和歌を以てこれを見れば、月のかけたるに事の意の如

くならざるを悲しみ、花の落つるに世の常なきをかこのが如し、

之れを西歐の文學に問ふも有り。十八世の末より十九世紀の初めに亘る。歐洲文學の如何に不穩にして、センチメンタルなりしかを。ゲーテがファウストの如きは近代の大文學にして、古のダンテ、沙翁等と並び稱せらるると雖も其世界觀に於て著しき相違あり。かれが思想の暗潮を湛へたるは、即ちその近代文學たるの特色なり、次章に於て近代歐洲文學の大勢を叙するの條下に於てこれを細論せん。

吾人は云へり古の民族は自然と共に棲息し、かれ等自からまた自然の心を失はざりき。而して近代の國民は自然に遠ざかれり、人

心また自から自然を離れたり。然れども至清至醇を希ふ人心はたへず、自然に歸らんとせり。造化に復歸せんとせり。かの人類の神々と共に逍遙せしと云ふ妙境に歸らんとするは、人間最後の希望なり、人類終極の理想なり。夫れ詩人文士は即ち人心最奥の思想、人類終極の理想を、希望し解説するものにあらずや。左れば近代の詩人文士が杼ふる處、歌ふ處は、理想にあり、自然に復歸せん事にあり、かれ等は既に自然を失へり。自然はたゞ理想として、最終の極地としてかれ等の思想に残れり、かれ等はこの理想を想ひ、かの自然を慕へり。然れどもかれ等をつなぐ時代と境遇との、かれ等をして一躍直ちに、この理想の懷に、かの自然の

掌に入る事を許さず、こゝに於てか煩悶あり、苦惱あり。彼等或はこれがために理想と現實の調和しがたきを啣ち、これがために自己の不遇を悲しみ、世の俗想を罵れり。この煩悶苦惱は或は發して矯激の文字となり嘲罵諷刺の文學となり、或は鬱して沈痛悲哀の抒情的詩歌となる。古代の詩人は多く平靜なり典雅あり、近代の文士は概ね矯激せり狂亂せり、今の詩人は古の詩人に比して多く泣き多く笑ひ、多く考へ多く思ふ、これ今の詩人文士が古の詩人と異りて苦痛多き所以あり。吾人は今斯くの如きの時代に接めり。今日の詩文は實に斯くの如き位置にあり、然れども理想豈に到底地上に來らざるの理あらんや、たゞへ終極の理想は來らざ

るも、其の一片の吾人の心に來らざる事あらんや。要は吾人が心に構ふる處理想的なるにあり、古詩人の心は自然と合せり、末世の吾人が心また自然と融合する能はざらんや。見よ、十九世紀の末葉に於ては既に、文學の新天地開けんとしつゝあるにあらずや。沈靜典雅の文學は復古の精神と共に來りつゝあるにあらずや。吾人は煩悶苦惱を重ねたる近代の詩人文士を重ねず、靜平典雅の古詩人にも勝りて彼等を重んず、然れども來るべき、古詩人の思想と更らに異りたる沈靜ある文學の起らん事を望むものなり。

近代の思想は、自然に遠ざかりたると共に、人間自身に欠點のあるを發見せり、古代の民族に反省の思想なきに反して、近代の思想は

深く自己を反省せり、自己を反省してこゝに自から欠點のあるを發見せり。古の人は自己を以て完全なるものと認めたり、少くとも自己の如何なるものなるかに注意せざりき。近代に於ける宇宙萬有の研究は、終に人間をして一個の生物たらしめたり、如何なる思想の變化ぞ、古に於ては人は萬物の靈長として擧げられたり、今日に於ては人も萬物と異なるなきに至れり、たゞへ人祖が犯罪はかれをして樂園を出づるの已むを得ざるに至らしめしと雖も、猶ほ上帝が特種の創造物たりとの感は、一班に古の思想を支配せり、然れども今日に至りては人間も亦た單に一個の創造物と化せり。形而下の學に於て、人間の位置斯くの如くに變じ來れり、形而上に於ても亦、これと

並びて人間の全然靈にあらざるを悟るに至れり、近代文學の多くは、人間の弱所を指摘し、自己の欠所を暴露して顧みざるなり。ことに於てかまた彼の厭世的の觀念著しく發達せしなり、ルソーが穢悔記を見よ、かれは明らかに自己の弱所を知り其の汚點を暴露せり、これを小説に徴せよ、古の小説物語に於ける人物は一斑に極めて悪なるか、極めて善なるものあり、今日に至りては善を寫して猶ほ惡の面影を残し、惡を示して又た善の跡を残せり、史を追ふて東西の文學を究めんには、この事跡自から瞭然たるべし。これを繪畫に徴するも然り、古に於ては、單に美人を以て畫題とせり、然れども今日の畫には世間一斑通常ある、欠點を備へたる女性の畫かれたるを見る。

シエレーは如何に世と戦ひしか。バイロンは如何に世を罵倒せしか、ルソーは如何に自己を反省せしか、シヨールペンハウエルは如何に婦人を罵りしか。佛蘭西の小説界に於てゾラは如何なる位置にあるか、かれはあらゆる方面に於て、其の鋭利なる筆鋒を以て人間の弱所を剔りつゝあるにあらずや、ゾラの極端なるは暫らく問はず、かの佛國寫實一派の小説に於て、吾人のまたこの氣運が生じたる、寫生法の自から影響しつゝあるを認む。近代の大勢斯くの如し、人間自己の反省的思想と、これより觀察したる、人間及び自己の欠所とは、近代の思想及び文學の特徴として見るべし。

近代の思想は既に自己の欠所を知れり。こゝに於てか、道義の問題は自から起らざるべからず、自己を知らざりし古の文學には、更らに道義問題の形跡を認むる能はず。近代の思想は自己の欠所を知りしと共に、これを補はざるべからざるを知れり。これ即ち道義の起る所以なりとす。夫れ自己の欠所とは何ぞや、則ち自己が、自然を離れ、完全に遠ざがり、至清至醇なるものに及ばざるを覺知せるを云ふ。左ればこれを補ふもの他にあらんや、たゞ道義あるのみ。故に近代の思想は道義の觀念に富めり、彼の感情と義理との衝突の如きは則ちこれなり。わが徳川時代の文學が屢々この種の道德の感情と衝突するを書きたるは、これを王朝の優麗なる文學に求むべから

ざる處なりとす。かのルソー以下の佛蘭西文學、ゲーテ、シャルレル等の獨逸文學、バイロン、ワルズサルズ諸派の英文學みな道義的觀念に溢れたり。これまた近代文學が古代の文學に異り且つ勝りたる一點なり。吾人はさきに曰へり。人生は到底道義的なりと。夫れ然り、故に人生を歌ふの詩人はた所詮道義的あらざるべからず。吾人は古代の詩文を誦して頗る慰息を得る處あり、然れども未だ之れに、吾人が煩悶しつゝある人生問題の解釋せられたるを見ず、人間内部の生命に剗切に感觸するものあるを見ず、人或は云ふ、詩文は既に古に於て其の極に達せり、かの想像的空想的の幻象に其の根底を有する詩歌の如きは、世の進歩と共に衰滅す、詩文は科學の世界、學理

の世界と兩立すべからずと。これ未だ深く考へざるの説のみ、吾人は今この問題を論すべき節にあらざれば敢て曰はす、たゞ道義問題の一事を以てするも、斯くの如き所論の取るに足らざるを知る、況んや猶ほ頗多の道理あるに於てをや。學術の進歩は詩文の發達を妨げざるなり、あらず、詩文はまた世と共に進みつゝあるなり文事に身を捧げんとするものまた安じて可なり。

第四章

東西思想の比較

題して東西思想の異同と云ふ。これ大問題あり、豈に一小冊子の能く盡す處ならんや。況んや一篇の論に於てをや。こゝには只儘に其の一端を言ふのみ。

今本題に入るに當りて東西の區別を定めざるべからず、其の西洋と云ふもの素より今日の歐洲を指す、東洋と云ふに至りては頗る漠然たるものあり、吾人はこゝに主として、東洋なる名稱の下に日本及び支那を指す、印度の如きに至りては、其の民族今日の西歐人種と同一にして、たゞ發達の處を異にしたるに止まれるものなれば、吾

人はこれを東洋の内に加へざりき。若し夫れふれを西歐の思想に入るが如き、更らに其の當を得ざるものなり。斯くの如く東西の區別を爲したる上にて、吾人は東洋の思想を以て實際的形而下的ありとし、西洋の思想を以て哲學的形而上的なりとす。

印度哲學の幽玄なるは暫らく言はず、かの西歐の哲學を見よ、形を離れ事實を脱却して、全然思想の世界に入り、而して後に事實の世界を觀察せり。これ恰も地を離れ高きに登りて、下界を觀察したるもの、如し、一見恰も空想に偏せるが如くなれども、其の實は斯くの如くにして、始めて能く下界全局の如何を知り、整然たる事物の條理を辨明し得るなり、かの論理法の如き頗る迂なるが如しと雖も

これ實に事物觀察の要義たるなり。プラトリーの哲學の如き其の深遠なる、今日よりして見れば殆んど解すべからざるが如くなれども、これ實に西歐哲學の生命たりしなり。彼れの思想は事相の中心を衝けり。空漠々たる處を打てり。何となれば彼處に大なる事實あり。事實の後ろに大なる現實なるもの隠れたればなり。かれの哲學が屢々其の名稱を異にするにも拘はらず、常に現象本体等の區別を爲せるは又これがためのみ。

科學は事實の間より其の法則を發見し、法則に依りてまた事實を説明するものなり。全然事實に關するものなり。この現象の事實に關する科學はまた西歐思想の生む處たりき。これまた恰も彼の事相を

脱却する哲學と、全然相ひ容れざるが如し。然れども科學はまた到底哲學と相ひ反するものにあらざ。兩者母子の關係ありと云ふべし、見よ哲學的思辨に乏しかりし東洋には科學もなかりしにあらすや。西歐に於て哲學的思想が專相を超越し、現象の後ろに隠れたる大事實を見たるの結果は、ふいに始めて科學なるものを生みしなり。人間思想修極の要求は宇宙の哲學的説明にありき。而して哲學はたい思辨的を以てのみ、この大業を果すの覺束なきを知れり、こゝに於てか助けを科學に借れり、科學は他に存在せしにあらす、かの高遠なる形而上的思想中に既に孕まれ居たりしなり。科學の終極の目的は何ぞや、蓋し事實の法則、事實の説明は人間に幾何の利益を與ふ

べきか、其の終極の目的にして、人間の生命問題に關するにあらすば、其の任や甚だ輕しと云ふべし。吾人は信ず、科學はまた形而上的思想の上に立ち、形而上的思想のために存在するものあるを。然り斯くの如くにして吾人は猶ほ信ず、西歐思想の特色は形而上的にあるを。

顧みて東洋の思想を觀察するに大概實際的なり。こゝには哲學起らざりき。科學生れざりき。獨り發達したりしものは、實行教ある儒教のみなり。儒教は素より、これを宗教と云ふべからず、はた哲學と云ふべからず、何となれば、事物の理法を説明しはた之を解釋するにあらずして、全く世に處するの道を講じたるものなればなり。其

の凡ての理論の如きはこれがために用ひられたるのみ。則ち其の目的とする處、倫理にあり、哲學的に基礎を置かざる倫理にあり。老子の如き莊子の如き、或は佛教の趣味を帯び、哲學的なれども、また畢竟するに倫理若しくは政治の範圍を出でざるなり。故に東洋の思想は却て實際の事實を見ること能はざりき。西歐思想の如く萬象を驅馳して實際世界の益を計り。理論を明らかにして人生の問題を明らかにする事能はざりしなり。其の根本の思想然り、今更らに吾人をして其の自然に對する相互の思想を覗はしめよ

一般に東洋の思想は自然に屈從し、西洋の思想は自然を征服したるものなり、日本の思想も支那の思想も、極めて自然に戀着し、之を

愛すれども之を用ゆる事を知らず、露霜には歌を詠じ、星くすを眺めては銀河の乙女を思ふといへども、西洋の思想の如く、雷鳴を聞いて之を通信の料に用ゐ、蒸氣の立つに運般の器を發明する事を知らず、自から自然に左右せられつゝあるが如き感あり、西洋にて斯く自然を用ふるの事實より考へて、切りに實用々々と叫ぶものあり、こは誤りたる考なるべし、西洋の器械發明の如きは、敢へて實用と云ふ思想より來りしにあらす、自然を支配しふる大なる思想より來りしものならん、何れにしても今日云ふ處の文明なるものは、此の根本の想より來りしものに相違なきが如し、此の邊又西洋道德どわが日本の道德等との差を來せる事に關係あるべし、通信運搬など云

はい極めて風雅の趣に反けるが如し、まことに風流ならぬに相違なし、而れども此の不風流却て或は大なる風流を出したるにあらざるが、人間が自然を征服したる結果は、シエロクスピアの如きゲーテの如き、大詩仙の生みしにはあらざるか。

日本及び支那に天地人と云ふ事あり、此の三者は蓋し如何なる時代にも如何なる國民にも、貫通して懷抱されたる思想なるが如し、天と云ふ考は凡て神に關はりたるものを概したる名なるべく、地と云ふは即ち自然の稱、人とは凡て人事に關したるものを云ふなるべしさてわが國の思想上に顯れたる處を以てすれば、此の内の地と云ふ事に重きを置きしが如し、若し古來の歌集を取りて見ば、如何に地

と云ふ自然の重んぜられたるかを知るべし。之に反して天と云ふ事に重きを置きし國民あり、希伯來人種の如きは之れなり、此の人種は殆んど自然と人間とを無視して、之をエホバと云ふ神の内に埋没せしめたり。希伯來人素より自然の思想に富む、然れどもかれ等の自然は常に神なる觀念に依れるものなり。憂にも神あり、喜にも神あり、木の葉の散るにも神あり、其の例を擧ぐれば斯くの如し「エホバは統へ治めたまふ全地はたのしみ、多くの鳥々は喜ぶべし、雲とくらすきは其の周環にあり義と公平とはその基なり」と概ね此の類なり、舊約書を取り、豫言の書を見、又其の最高の思潮を顯せる詩篇を讀まば、如何ばかり神と云ふ考が彼等の思想に印せられて、凡

て自然と人事とを其のうちに没し去れるかを見るべし、此の思想の
 ためにイスラエル一國に止まらず、後に來りし基督教にも其の勢力
 を及ぼし、中世紀より今日に亘りて綿々絶えず、人事を説くに神の
 舞理と云ふ事を以てせんとし、今猶ほ目に見るべからざる。手に觸
 るべからざる、而して實在者なりと云ふ、神を論ずる神學なるもの
 を見る、或る人の此の神と云ふ思想こそ、歐洲今日の文化を爲した
 るものたれと云ふ、一見理あるに似たれども歐洲今日の文化は一神
 の想を除き去るも猶何者かを殘すべし、其の主座を占むるの榮は決
 して希伯來想に歸せしむべからず、某氏此の天地人なる題にて、日
 本には地の思想多くして天の思想甚だ乏しきを慨せられし事あり、

素より此の天に關する思想の乏しきは、全くわが文學の欠處にして
 悲むべき事たり、吾が文學をして新天地に入らしめんとするものま
 た深くこゝに考ふるなかるべからず、

西歐の思想には人間に重きを置けるものあり。希臘の如きは其の主
 なるものか、哲學此の國に起り、科學此の國に起りて歐洲全躰に影
 響を及ぼし、永く不滅の國民たるに至れり、余は久しく思へり、道
 徳と云ふ事は去る事ながら基督教を歐洲より取り去りたらんより、
 此の希臘の思想をして袖を連ねて、歐洲の想界より退かしめば更に
 偉大なる變化起るべしと、斯くの如くなれば、恐らくは歐洲の文化
 は殆んど無に歸して、荒涼たる原野とあり終はらんと、而して其の

希臘思想の根底ハ何處にありやと言はゞ、即ち人間と云ふ事に重きを置きしに在り、此の人間に重きを置きし思想は、能く自然を征服して、實用の上と思想の上とに之を用ゐ、此の思想又た能く天と云ふ神の思想を生み出して、人間の事をして平凡ならざらしめたり、思ふに人は此の宇宙間の主位にあるものなり、唯我獨尊を云ふにはあらずと雖も、人ありての世界なり、人ありての神なり、何事も人間に歸せざるべからず、故に人は其の周圍にある自然を征服して、之を支配すべきものなり、斯くの如くして始めて、人間百般の物質的需用は満足せらるべし、而して只自然征服を以て終はるべからず、次で天と云ふ神なる考を生み出さるべからず。凡そ人には靈妙な

る理性あり、此の靈妙なるもの即ち自然を征服するを得しなり、人は必らず自から此の理性、即ち人の心靈的の側面を觀察すべきものあり、此に於てか始めて天と云ふ神と云ふ思想を出す、已に反省し此の思想を得て以て心靈を説明せんとす、凡そ人間若し心靈に重きを置き、己に省みる處深ければ、自から此の思想を起す、左れば此の思想は己に省みる處深きを示すものなり、故に又神と云ふもの特に貴き外に、人間の貴き處あるあり、見よ、人間を外にして神と云ふものに重きを置くの結果は如何なるべき、此の思想の最高の點まで進みたりしと云ふ、希伯來の思想は能く優に其の民族をして世界一の國民たるを得せしめしか、多く神學を究めたるの結果は、

幾何の力を人間に及ばせしや。神學なるものは其の尤も得意とする道徳に於てすら成功する處少なきにわらずや、神と云ひ天と叫ぶは、自然に屈從すると更に異なる處なし、神學の如き人間を離れて考へられたる神は、空漠々として殆んど意味なきものたらんとす、今の基督教の如きはまことに此の弊に陥りしものにして、人間のためて研究すべきものは神なりと云ふ、果して然るや疑なき能はず、吾人は日本の思想が自然に屈從したるやの跡あるを惜しみ、并せて一切天或は神と云ふ事に思ひ付かざりし事を悲む、たゞ或る論者の如く神に重きを置かず、人間に重きを置いて云ふ、吾人識淺く日本の思想が如何の發達を爲せしやを詳らかにせずと雖も、一見するに、其の

人事に互れる事の少なく、並びに人間を思ふ事の深からざるにはわらずやと、感ずるもの少なからず、此は吾人が眼の僻めるためか。今暫らく吾人をしてわが詩界に逍遙せしめよ、わが文學史の開卷にある萬葉集には一定の評あり、其の自然に對する力ある聲は、赤人の富士の歌を取り出さんも愚かあり、古今集の時に至りても、其の序の偏へに自然に懸戀するは、讀む人の容易に認め得べき處にして、人生の半面は必らずこゝに示されたれど、未だ少しく足らぬ感のせらるゝ事多し、當時よりすれば素より、今日に至るまでなほ、人情を寫したるものとして、名聲の噴々たる源氏物語に於てさへ、其の自然の力の多く顯れたるを見るへし、まことに何れの歌人の詠を

見るも、散文と云ふを見るも、其の筆一旦自然を寫すの節に至れば殆んど趣を殊にするが如きあり、源氏の如きは、素より能く人間を観察したるに相違なきも、猶自然の眼を以て人間を觀しかと感せらるゝ節なきにあらず、

岩がくれの苔の上になみゐて、かはらけまるる、おちくる水のさまなと故ある瀧のもとなり、頭中將、ふところなりける笛とり出でふきすましたり、辨の君扇はかちうちならして、とよらの寺のにしなるやとうたう、人よりはことある君たちあるを、源氏の君いたくうちなやみて、岩によりゐたまへるは、たぐひあくゆしき御ありさまにてぞ、なにごとにも目うつるまじかりける。

人の心の様々なるを畫きたるは全篇に亘りて見ゆれども、凡そかくの如く人を自然の間に置きたる節數多見ゆ、須磨の浦にて雨風恐ろしき夜浪たゞこゝもとに吹く心地し給ひ、琴を取りてかさならし給ふ、名高き節の如きは、尤も好き例ならん、あはれ自然界と人と等しかと思はるゝ處多し、

人間を自然の間に立たしめて見れば、まことに愛すべくして亦美しく、而かも人間を説くに易きものなり、然れども自然のみにては到底人間を説明し盡す能はざるものなり。ヲルズナルスは能く宗教家に愛せらるゝ詩人にして、深く自然を觀想したりし人なり、故に其の人を見るや又自然の間に於て見しが如し、

Three years she grew in sun and shower.

Then nature said, A lovelier flower

On earth was never sown;

This child I to myself will take;

此れ明かにナルズアルスの自然と人とを觀らるべし、更らに同じ人のベツガアの篇、ソリタリー、リーパーの篇、ナツチングの篇など、何れも自然のうちには銘け込みて、彼處より人間を觀たるものゝ如く其の人間は人間らしからず、恰も幽玄界のものゝ如くに感ず、蓋しウ氏は初めより人間を觀たる人にあらざれば是非なけれど、亦以て自然より觀たる人の人らしき完き人にあらざるを觀るに足らん。獨

逸のシルレルの如き、詳らかに知るにはあらずと雖も、亦自然を慕ひし一人なるが如きは、其の逍遙篇、技術者の篇等に依りて僅かに知らるべし、左れば其の戯曲井ルム、テルの如き、好くわが日本の想に適し、全篇巧に自然と契合せるが如き大にわが國風に合ふが如し、而して其の人間の活動に至りては、ナルズアルスの人間の如く、枯寂にはあらずと雖も、餘り單調にしてテルの如きも、まことの人と思はれざるが如き感なくはあらず。足利の末葉より徳川時代に及び、著しき發達をなして當時の美術思想を發揮せしものは、生花、茶の湯、俳諧、謠曲等なり此れ等は皆な自然崇拜の結果にして、わが國民の氣風を顯はすものなり、吾人

は或る一種の論者の如く、之を末技として全然棄て去るの勇氣を持たず、此れ等の根底に到底凡骨の人或は西洋趣味の人の解す能はざる美感の埋もれてあるなり、只吾人は其の自然崇拜の結果なりと思ふが故に、甚しく格別の重きを之に置く事は爲さざるべし。此の一流の藝術は盛大を極めて其の後には往々末技に流れ、ために自から之が反動を招ねき、有爲の人士と謂はるゝものをして、誤つて之を排斥せしむるに至れり、而して此の時に當りては、美術家も又之を排斥するものも共に、其の精神を忘れ、此の間別に愛すべきものあるを悟らざりき、蓋し斯くの如き排斥論者は、夫の厭ふべき乾燥したる儒學派より起こりしものならむ。

抑も自然とは天地山川の謂と解せられたり、實に自然を口にすると其の動もすれば、青山に對して悲歌を賦すと云ひ、疾風雷雨のうちには上帝を見ると云ふが如き、大言壯語をなす、大言壯語素より好し、バイロンがナルズヲルスを罵倒したりと云ふ事、素より謂はれべき事にはあらず、然れども自然とは、曾に高山大川のみを云ふにあらず、疾風雷雨のみを云ふにあらず、要は此の自然に對する人の心にあり、曩きに云へりし如く、人間を根底に於て見るにあり、人間たに根底にあらば、自然の量の大小は必ずしも問ふ處にあらざるあり、實にキリストは野の百合を見よと教へたり、人の思想の如何に依りては、木葉の黃落するも、幽花の谿谷に咲くも、何れか大なる聲な

らずとせん、更らに云は、日常の行爲も取て詩料とあすに足るべし
 特更に廣き天地を徘徊するには及ばざるなり、此の意義に於て余は
 生花茶の湯の如きものを棄つるの勇なく、併せて甚しき價值をも之
 に置かざるあり。之を以て末枝の如くに爲せしはもとより罪、人に
 あり。近來基督教の入り來れるありて、更らに斯くの如き細微なる
 ものを觀るの眼を塞げり、今の吾が國の此の教徒は教祖の野の百合
 に向ひて、述べられたる言とは甚しき相違をなせり、試みに其人士
 の言を聞けば大言壯語盡さいる處なく自然に對する考も徒に大なれ
 ども、猶古人の稱へし自然と異なる處更らになし、蓋し只基督教の
 皮を被れる儒教なればにやあらん、云ふ處徒に大にして之に思想の

通ずるなくば、只碌々たる巨石のみ、誰れか小なりと雖も金剛石の
 光輝燦爛たるを撰ばざらん、小事をさへ眞に見る能はず、如何で大
 なるものを歌ふを得んや

Wee, sleekit, cow'rin', tim'rous beastie,

O, what a panic's in thy breastie!

Thou need na start awa sae hasty,

Wi' bickering brattle!

I wad be laith to rin an' chase thee,

Wi' murdering pattle!

* * * * *

Still thou art blest, compar'd wi' me !

The present only toucheth thee :

But, Och ! I back ward cast my e'e

On prospects drear ;

An'forward, tho' I canna see,

I guess an' fear.

8-2-20
Savigny

此はバルンスが鼠の歌の前後なり、其の題目の小にして又穢き、自然界中にまた他に見るべからざるものあらすや、而も亦優に文學史上の華たるを失はず、近く故透谷子が「龍丘子」の歌なども、亦此の列に置くを得んか、

日本に於ける族制々度は徳川時代に至りて其の極に達し、士族と平民との區劃判然として立ち、美術さへ其の各部に於て個々の發達を爲せり、書には在來のものに對して浮世書なるものを生し、音樂には琴と三味線の如き各の族制に對するふさはしき代表者を出し、文學に至りても一種の平民文學とも云ふべきものを出して、上流社會の文學と正反對に立ち相ひ並びて發達をなせり、この平民より出でたる文學はわが文學史上の華として見るべきものにあらざるか、此は徳川時代を現せし所謂鹿爪らしき儒教主義、ことに其の繩墨主義の感染を免れしため、高遠なる想を欠きしと云ふ瑾はあれど當時平民の間に鬱勃たらし、奔放不羈瀟灑艶麗の象を顯はし、まことに能

〇〇人間の自由なる精神を發揮し、多く人間と云ふものを其の題目と
 〇〇するに至りしは、喜びて可なるものにあらざるか、此の自由の精
 神は遠く王朝の萬葉時代にありしもの同種と見て可なるべし、蓋し
 王朝平安朝に於ては「大和國は丈夫國にして山背國はたをやめ國」と
 云はれたるか如く、多少の差はあれど、其の周圍の優雅纖麗なる自
 然の内に養はれ、吉野の花須磨明石の眺めは、自づから人の心に印
 せられて、當時の詩人を造りしに與りて力ありしならん、即ち大に
 自然の力に懸戀して之に左右せらるゝに至れり、今や徳川氏の時に
 至りては人事やうやく繁くありて、自然を觀るの時少なく、江戸の
 如きに至りては、殆んど自然の愛すべきものを見る事さへならぬ位

置にありしかば、勢ひ人の心は人事に傾くに及びき、左れば三味線
 は琴に比して、更らに人間らしき聲を出だし、浮世書に至りて大に
 人物の書き出されたるを見るに至れり、文學上には西鶴近松を首座
 に置きて無數の文士を出せり、更めて言はずとも、西鶴近松等の如
 何に能く人間を觀して畫きたるは、其の著作を一讀したるものゝ容
 易に認め得る處なり、芭蕉の如きも自から古への歌人と異りて、其
 の詠する處の、幽に人の心裡に入れるが如きものあり、もと芭蕉は
 自然詩人たるを免れずと雖も、猶此の如く人間に反省せしは時勢に
 關しての故なるべし、余は徳川文學が一面人間を題目としたるを喜
 び、更に他面には深刻に人間の靈性問題に立ち入らざりしを惜む。

顧みて歐洲の詩歌を讀むに其の詠せし處は人事に關するもの多く、
 シエークスピア、ゲーテは更らなり其の自然を詠せしものさへ。自
 ら人間に歸着するにはあらずやと思はるゝ節甚多し、もとより抒情
 歌と云ふは自家の胸中を吐露するものなれば、自然を歌ふにも自か
 ら自己を顯はし、從て人間を顯すと云ふ事多きは勿論なり、今は之
 に付て細かに亘るを得ず、同じく抒情と云へども、わが國の歌は人
 間に重きを置く事少く、西洋の深きに及ばざるやの感あり。今人
 間と云ふ問題を言語の上に見るに歐洲の語には性なるもの甚多し、
 太陽を男性とし月を女性とするは日本支那にも見へし事なれども、
 獨逸の如きは山河草木一々性を有し、殆んど凡ての名詞に男女の性

を付したるは、此れ即ち自然界を人間視したるものなり。又歐洲に
 は擬人法と云ふ事甚だ多し、日本に於ても時に之れなきにはあらず
 と雖、歐洲の如く甚しきを視ず、此は言語の成立に由來する處あら
 んも、又自然を活物として視る事より起りしにはあらざるか。殊に
 希臘に於ては自然の各處に神ありて、凡て男女の性を備へ、甚だ人
 間に近かりしは前章に述べしが如し。凡そ斯くの如き證跡は、概ね
 歐洲思想の人間に重きを置けるを示すにあらざるなきや、
 シエークスピアには自からシエークスピアの自然あるべし、然れど
 も其の自然に關する點のみを取りて、此の人を評せんは嗚呼の極な
 り、同じくゲーテにはゲーテの理想あるべし、されど此の人を論ず

るに神に關する思想のみを以てする、恐らくは迂論たるべし、此の二詩仙の良く人間を観察したるは特更に云ふには及ばざれど、ゲーテの自然は別に特殊の趣を備へたる處あるべし、其の小河の歌、月の歌、すみれの歌、などを擧げんには限りもなし。今こゝに手近なるもの一つを擧げん、「良夜」と題するものなり。

Nun verlass'ich diese Hütte,
Meiner Liebsten Aufenthalt,
Wandle mit verhülltem Schritte
Durch den öden finstern Wald:
Luna bricht durch Busch und Eichen,

Zephyr meldet ihren Lauf,
Und die Birken streun mit Neigen
Ihr den süssten Weihrauch auf.

Wie ergötzt' ich, im Kühler,
Dieser schönen Sommernacht!
O wie still! ist hier zu fühlen,
Was die Seele glücklich macht!
Lässt sich kaum die Wonne fassen;
Und doch wollt' ich, Himmel, dir

Jansend solcher Nächte lassen,

Gab' mein, Mädchen Eine mir.

大抵斯くの如く、前のシャルズシャルズと正反對に立てるが如く、自然に魂を入れならんが如し。

わが文學史に於て内觀の深くして、心裡の苦悶を経たるもの西行の如きは少なかるべし從て其の自然も大に他と異なる處あり。

もの思ふ袖にも月は宿りけり濁らですめる水ならねども

雲もかゝれ花とて春に見て過ん何れの山もあだに思はで

こゝを又我すみうくてうかれなば松は獨りにならんとすらん

知らざりし雲井のよそに見し月の影を袂にやとすべしとは

自然と彼れの心と相ひ争ふが如きものあり、然れども畢竟するに

I love not man the less but nature more と絶叫するバイロンの深刻

なるに如かず、蓋しバイロンは自から自然を慕ふと雖も、彼れ決して自然詩人にあらずして、心裡の苦痛に悶絶せし結果、彼れをして自然に向はしめたるものにして此の語たまく、彼れが人心に於ける感の深さを見るに足らんか、此れより英吉利の文學に於て多く希臘的影響を被れる、スペンサル、ミルトンより下りてキーツに至

る自然并びに、一種の世界觀を抱けるシエレー等の自然を觀るは、こゝに必要にして興味あるべげれども、冗長に亘るの恐れもあれば省かん、讀者若しキーツの杜鵑の歌、マエレーの「スンシチーブ、プ

ラント」の篇等を見れば、自然が活動踴躍せるを見るべし、之に反してわが詩人にありては、屢々人間が自然の如くに静かにして美しきを見る、此れ等即ち東西の相異なる處なり。

かくの如くなれば吾人は思ふ、凡ての問題は先づ人自から深く思ひ廣く考へて、起りしものならざるべからず、かくて高き神と云ふ者も出づべく、まことに自然をも知らるべし、宜しく皮相の見をばなれて、遠く人心の奥義を見るべし、此れをまことの現實と云ふ、かゝる観察を下して始めて、まことの哲學顯れ、まことの宗教起り、まことの科學發達し、従つて様々の發明所謂實用に供せらるゝものも、出で來りて發達をなすべし、之を思はずして猥りに神の名を稱

へ、連りに高遠ならん事を求むるは、其の基を誤れるにはあらずや、

また盛んに實用を稱して愈想を退くるものあるも、同じく誤解せる處あるにあらずや。近時大ひに科學的と云ふ事、恰も流行の姿をなし、哲學も科學的なるべしとか云ふ、而して歐洲の今日も大に科學に重きを置けり、まことに然るべし、左れを科學のみにては此の宇宙の問題に對して満足なる答を與ふる事は難からん、科學の根本の思想も其の基を、先きに述べしか如く人間とは何ぞやとの人生問題に置かざるべからず、抑も人は此の問題に遭遇して、やがて之を解かんために、科學に依るに至る、此の秩序に依らずして、たい科學のみを喋々す、恐らくは終に科學も其の完き發達を爲し難からん、

科學の根底此の人生問題にありて、始めて人生實用の發見發明をも爲すに至るべし、始めより科學に依るもの、はた實用のみを主とするもの、其の可なるを見ず

近時又世間的と云ふ語を聞けり、出世間など云ふに對する、佛教より出でたる語なるが、其の意義は如何なるものか、恐らくは人事に亘ると云ふ意ならむ、左れど若し之を以て單に人事に關するものと云はゞ、予は此の如き語の流行せざらん事を願ふ、余が望む處は、文學に關する事は素より凡ての思想は人間的にして、凡て人の靈性を以て始めとなさん事にあり、世間的と云ふ語も此意味に於て用ゐられん事を願ふ、大文士のうつし盡きたる多くの著作にして、人間

の千態萬狀を顯したるものは、もとよりたゞ其の表面の事實をのみ見たるものにあらずして、人の性情の奥深き處を見たるものなり、大文士が著作の不朽なるこゝにあり。

知らず此れ等の事は吾人が獨斷か。人生の事漠として知るべからず知るべからざるものを知らんとするは人間なり、希くは永く人間をして人間の研究物たらしめよ。

第五章

近代の歐洲文學

吾人はこゝに近代歐洲文學の大勢を叙し、歐洲思想の如何に運動しつゝあるかを明らかにせん。今暫らく近世史の初めより筆を着けしめよ

十四世紀の初より十六世の終りに亘りたる文藝復興と云ふ思想の運動は、世界の歴史に於ける空前絶後の大事件にして、實に此れ近世の歐洲を産み出したる一大時期なりと云ふべし、然れども思想の發展し行くや必ず一朝にして成るものにあらず、此の文藝復興の活劇が十三世紀よりやゝ運き初め、年を積みて其の勢を増したる如く

其の終りに於ても凡ての改革が此の期に於て完成せられず、其の名残は猶最近の時代にまで及ばせり、西歐の天は此の大活劇の後に至りても妖雲猶ほ残りて全く清からず、終に鬱積して再び爆發し。十八世紀の末より十九世紀の初めに亘る思潮混亂の時代とされり、此を以て復興期の變化に比するに、後者の大なるはもとより并びあきも、其の状態自から單純なるものあり、然れども近代に至りては甚しき複雑を極め、各種の思潮混亂してやう／＼十九世紀の世界を産み。其の學術文藝政治及び宗教を煥發するに至り以て曩日の文藝復興を完うしたり、左れば評家が獨逸に於ける宗教改革より進んで此の佛國革命前後に於ける運動を指して、猶文藝復興の名残とせるも

宜なり。

西歐に於ける想海の潮流はもとより其の數少からず、各其の歴史を有し凡て其發達を異にし、互に精妙なる關係を有するものなれば、僅かに其の一端だに捕へて之を考察するは容易の事にあらずして、慧眼炬の如きものすら其の批判の當を得る事難し、況んや其の大勢の如何を究めん事到底及ばざる事なり。然れども茲に其の大綱を取り其の歴史の淵源を尋ねて之を究るに、實に希臘より來りし思潮と希臘より來りし思潮とは其の主要なる潮流なるが如し、希臘の思潮は既に屢々論しられたる處にして西歐の文學を味ふものゝ汎ねく知る處なり、希臘來の思潮とは即ち彼のカルデヤのウルよりアデラ

ハムがカナインの地に携へ來り、シナイの山頭にモーセに依りて統一せられ、レバノンノの香柏シヤロンノ野の百合の花によりてかざられたる基督教の發揮する思潮なりとす、此の二潮流は西歐の想海に於て或は合し或は離れ、或は和し或は争ひ、中世に於ては希臘來の思潮勢を得たりしが、文藝復興以後に於ては希臘の思潮に倒され、再び起りて獨逸に於ける宗教改革となり、英國に於ける聖教徒となり、ウエズレイズムとなり、其の流綿々として今日に絶へず、蓋し希臘思潮と並びたる大潮流ありとす。

抑も西歐の各國は既に文藝復興の時に於て其の徴を顯はして、各國みな特有の性質を發揮し英佛獨凡て其の復興の趣を異にしたりしが

近世に至りては此北方人種の特性和著くゼルマン人種の思潮大に活動を初めたり、若しシエクスピアが「ハムレット」「マクベス」等の劇を取り、之を「ロメオ、エンド、ジュリエット」「マーチヤント、オプ、ヴェニス」等の曲を比し來れば北歐の痛烈なる南歐の煦和に對して自から一種の思潮を湛へたるを見るべし、オヂンの神の歴史は蓋し近代に顯れたる西歐想海の暗流にして、當時の思潮混亂を致したるに與りて力あるものなるべし、試みにゲーテの大作「ファウスト」を精讀せよ、當時如何に嶺南嶺北、希臘、希伯來の思潮を錯亂せしかを見るべく、併せて此の大詩人が其の暗潮に乗じてかの大作を完成したる跡を見らるべし。

人心の激興するや常に無極に向つて走らんとす、然れども人性の限ある常に其の高遠なる精神は防遏せられ、形骸は動物と等しく理性のみ獨り卓越したるがため、心身の争鬪常に人間を苦ましむ、此に於てか或は其の動物的の性情に屈して地上に呻吟する蟲の如きに至るあり、中空に浮びて歸着する所なきに至るあり、或は身地に匍匐して猶天を談ずるあり、或は天空を想界に書きて地に安んずるあり、斯くの如きは活動せる人間心裡の争鬪より出づるものにして、又實に十八世紀の末葉より十九世紀の上半に亘れる西歐思想の狀態なりき、當時全歐の人心擧て激興し、こゝに想界の史上に永く記さるべき、各種の暗流を溢らしたり、此の暗流は或は發してエルテリズム

となりて、或は屈してセンチメンタリズムとなり、或はローマンチシズムとなり、或は英國に於ける湖派詩人の一流となり或はバイロンの一流のサタン派とあり、もろくの印跡を残心たりと雖も凡て當時人心の活動が無極を欲して顯れ來りしものなり、其の文學上に殘せし印跡に至りては必らずしも醇あらざるものあるも、亦以て一代の人心が舊日の不調を破りて新世界の産出を爲したる跡を見るに足るべし、

傳ふる處にして事實ありとすれば、聰明ゲーテの如き幾夜か劔を枕にして蓐に就きたりと云ふ、果して「ファウスト」に顯れたるゲーテは一とたび此の暗流に乗りし人なり。此の思潮の英國に顯れしは早

くゴールドスミス、リチャードソンの時に於てす、然れども其の井カ、
 ー、オブ、エークフ井ルトがエルテルを呼び起し、クラリッサガ
 ソーをしてコロイズを記さしむるに至りしことを預想せしや否や、
 夫はわれ等の知らざる處あれども、其結果が獨逸佛蘭西の兩國に意
 外なる勢力を興ふる事となりしは實に驚くべき事實なり、此の前後
 は即ち獨逸に於ける狂瀾急迫の時代にして年少氣銳の思想家が時の
 制度に憤慨し、一意社會の改革に突進し、シムレルをして其のロイ
 ベル以下の不穩にして而も氣焰萬丈なる劇詩に筆をつけしめし時な
 りとす、蓋し其のウェルテンベルクに於ける抑壓の甚しき無辜の人
 にしてたゞ侯の意向に依り獄に投せらるゝもの一二にして止まざり

しと云ふ、此の如き有様は特に硬骨シルレルの如きをして憤起せしめしならん、ゲーテに於てはむしろ沈靜にして彼のエルテル時代にありしも恐らくは既に美術の内に其の安きを求むるの傾向ありしか斯くの如くにして狂瀾急迫の時代は僅かに脱しシエレルも學術の研究に身を委ね、歴史哲學の内に暫らく安を求むる事となれり。此等の詩人は又此の時より宗教美術の想界に入りてやうく其のセンチメンタルを脱し去りたるならん、そは其の叙情詩の前後に於て著く異なるを見ても知らるべし、即ちシルレルに於ては其の最終の所作フルヘルム、テルとなりゲーテに於ては復雜、容易に其の思想の變遷をたゞざるべからずと雖も、イフ井ゲニア、アウフ、タウリスより自

から變り行きて最終のファウストに思想の完成を告ぐるに至れり斯くの如くにして彼等は狂瀾急迫時代不穩の調は脱したりといへどもナルに於ける自然に對する欽慕と王者に對する反抗とは當年の意氣を忍ばしめ、ファウストに於て其の想を復雜したると共に暗黒時代の跡を止めたるは、われ等をして其の懷疑の時代を想ひ起さしめ、并せて其の思想が如何に良好なる發達を爲したるかを喜ばしむ。獨逸に於ては斯くの如くにして美術的製作の上に永く不滅の名を残したれば、從て曩きに年少氣銳の人士が望みたりし政治社會の上に大なる變化の見るべからざりしは又自然の結果と云ふべし。

之に反して佛蘭西に於ては全く反對の結果を起せり、ルソーの自然

に反れど云ふ聲はヲルテール、モンテスキュー等の聲と合して全く社會的の運動とされり、佛蘭西の革命は實に此れ等思想家の勢力が直接に關係したるにあらずして、ルイ王が薄弱なる身を以て國政の整理を始めたるにありと聞けど、もとより間接に於ては大なる關係あくばあらず、之をスチーブン氏に聞く、ゴールドスミスの涙を流すや、全くわが薄命を悲しみ、自から退きて其運命に満足せんとす、然れどもルソーの其の戀人の爲めに泣くや、自己を以て天下を推しわが思ふ處を實行に顯はさずんば已まざるの勢ありと。蓋し佛蘭西に於ては此の革命的の氣焰甚しく思辨家の間に行はれたりしなり、宜なり「ドン、シュアン」に於けるよりは「ヌヴェイユ、エロイズ」に害

毒多しとバイロンの主張せしや、斯くの如く其の氣焰既に社會に向て發す、其の結果は此の典雅優美なる國民をして終に美術に於ける製作を残さしめざりしは誠に惜むべき事なり。然れども之を社會の顯象としては佛國の大革命となりて、史上幾千萬年の後に至るまで不滅の遺物を残し西歐各國の君王をして震慄せしめ、能く近代の平民政治を産したるは蓋し此の國民の榮とする處あるべし、佛蘭西に革命のあるや英國の詩人は勇躍して之に趨けり、謹厚ナルズワルスの如きも行けり、強硬ランドルの如きも行けり、バイロン、シェレーの一派が之を歓迎したりしは素よりの事なり、英國の想界が擧げて之に賛同したりしは、曩きに獨佛を動かしたる同し思想が

いよく活動しつゝ當時に至りしを見るべし、英國に於ける此の反抗的革命的の思想は既に深くして、エリサベス王朝に於ける時よりマロー一派の猛烈なる勢にて知られたる處なり、佛國革命に前後して英の突進的詩人が、當時の抑壓制度に満足せずして、或は宗教的或は社會的に切りに當時に反抗せしは、其の行爲に於て見るべく其の製作に於て見るべし、バイロンの「マンフレット」には其の不満の聲を聞くべく、シェレーの「プロメシアス」には其の反抗の氣焰を覗ふべし、シェレーの如きは既に其の少壯の時「無神論の必要を論ず」と言へる一篇を草して當時を罵倒し、終に學校より放逐せらるゝに至り、後に至りても常に政治に關する諸篇を草して時事を痛論せり

彼等が當時の制度に對する意向を知らんと欲せば彼等の家庭が常に言ふべからざるの慘狀にありしを以て見るべし、バイロンの母子が互に衝突して相ひ納れざりしは能く人の知る處なり。シェレーの如きも父子意見を異にして相見ず、老祖父の卒するやシェレー馳せ至りしと雖も、終に入れらず徒に門口に佇立し居たりと云ふ、ランドルに至りても其の性急なるや、永く父の家を棄つるに至りしことあり、新思想と舊思想とが衝突して一家の間に此の悲劇を起したるは時勢の然らしむる處なりとはいへども悲むべきの境遇にありしものにあらずや、然れども彼等は獨逸に於ける如く全く學理と美術との間に入る能はず、はた佛蘭西に於けるが如く全然政治に走る能はず、

彼等佛國革命の極端に走るを見ては焉んぞ其の害惡を嫌惡せざるを得んや、彼等の氣焰萬丈なりと雖ども終には其の非なる所を顧みて各々其の立脚地を求め、湖派詩人の如く自からの世界を造りて安きを求めたるあり、バイロン派の如き到底休息する能はず江湖に放浪し相率ひて伊太利の自由の野に遊び、多くは命を異郷に殞せり、千八百二十一年の如き伊太利のピサは英國の三詩星を遊ばしむるの榮を得たり、此の年に於てシェレー、バイロン、ランドルノ三天才は前後して此の地に集まりしあり、此れ等多恨の詩人去つてこゝに幾十年ローマの寺院は今猶ほシェレー、キーツの屍を藏せり、

英國の思想家が詩想と政治との間に出入したるの結果は、即ち今日に見るが如きその良好なる立憲政を得たりと雖、其の結びたる果は美術的製作の上にもまた少なからず、バイロンがマンフレッドも亦有數のものを見るべく、遠き希臘の調を傳へたるシェレーがヘラスの如き、はたミルトンのリシダスと共に稱せらるゝアドーネスの賦の如き、キーツがエンヂミオンよりオード、ソンチェットの如き、ランドルの詩賦及び其のイマヰナリー、コンバーセイションの如き、歐洲の文學多しと雖も斯くの如く、盛況を極はめたるは他に見るべからざる所なり、此の時に當りては北歐の思潮その特有の氣焰を以て希臘希伯來の思潮を滅し去りたるが如きものありと雖も、此れ等思潮の跡は瞭然として認らるべく、之をゲーテの詩に徴して知るべ

く、ソルベロに於てだに多少は顯はれたるべし、然れども此の思潮の尤も明晰に尤も自然に近代の思潮に冥合されたるは、此の混亂の思潮にやゝ遠ざかりたるキーツの詩に於て見るべし、キーツは生れながらにして希臘人なりと言はれたる如く、其の諸篇みな典雅沈靜自から新思潮に洗はれたる古美術の如きものあり、ランドルも亦深く希臘の古典に私淑したる人にして、其の殘したる諸篇に於て彼の古の思潮の活動せるを見るべし、此れ等は凡て其の著きものなれども之を精細に究めたらんには、沿ねく此の思潮の當代に流れて其の文學を浸したるを知らん、

宗教の事に至りては凡て其の舊來の形式を打ち破りたる事なれば、

新らたに建設せられたるもの殆んどなきが如し、革命の前後よりして今日の高等批評とも言はるべきものやうし、其の勢を起して、舊約の聖經に顯はれたる傳説を科學の方面より分解し、モーセの時に於ける紅海の奇跡、エリコの城の攻撃に於ける日輪の停止など凡てみな排斥せらるゝ處となれり、此れ等の事跡は果して據るべき處あるものなるか、將た傳説に過ぎざるかは今日に至るも其の問題とされる事なれば、其の意見の如何は問ふ事をせざるも、既に希伯來の思潮が一種の變化を受けたるは疑を容れざる處なり、バイロンの惡魔らしきはもとより一斑の定評ありと雖も、其のカインの篇天地の篇の如き一種の希伯來思潮を湛へて、新宗教を喚起するに與りたる

こと必らずしも無しとすべからず、況んや彼のシェレールは無神論の必要を論じたりと雖も其の基督教を論ずるは。誠に公平にして頗る當を得たる者あり、且つや其の歌ふ處概ね宗教的思想を含みたるは、之を味ふ人の容易に認め得べき處なり。然れども之れをや、建設的の方に導きたるは英國に於けるコレリッヂの如き人とす、コレリッヂは湖派の詩人にして學識深く兼ねて高遠の思想を有したれば。恰も宗教の方に向て進むべき位置にありし人なり、深くカントに私淑し其の哲學を以て立脚地と爲し所謂ユニテリアンとも云ふべき宗教を有せり、其の宗教の如何は今特に論すべきにあらずと雖も、要するに舊形式を脱して新思潮を呼吸し、ストラウス、ハナン等と相

ひ連關して今日の自由派なるもの、基礎を建てしや疑ふべくもあらず此れ等は蓋し此の混亂の期より出でたる希伯來思潮の新らたなる姿あるべし、而して此れ等各種の思潮は雜然として相混じ相亂れて容易に其の關係を明にし難し、たゞ吾人は希臘の思潮と希伯來の思潮とが此の時に於ても猶綿々絶えずいよく盛に流れ行きしを知るのみ。

凡そ人の思辨が古に返るに従ていよく單純なるは自然の理なり、始めは外界の顯象を嘆美したるもの後に至りては内界の活動に驚く希臘の哲學を言ふは事大に過ぎたれども試に之を以て例せんに、其の初めは全く自然界の顯象を討究するに過ぎざりしが終に詭辨派の

懷疑に落ち、ソクラテスに於て内界に反り、人間自身の研究に入れり、是れ紀元前幾百年前の事實ありと雖も、想界の事は屢繰り返され、近代哲學に於ても同じ道程を経てヒュームの懷疑とありし事は、何人も能く知れる處あり、此の後に出版せられたるものは即ちインマヌエル、カントなりとす、カントが研究の對象は人間の理性其のものにありしは又人の容易に認むる處なり、而して此の内觀は當時より現世紀に亘れる一斑反省的なる傾向を代表したるものと云ふべし、左ればカントの如きも明らかに此の潮流に推されて顯はれし大思想家とすべきなり。

カントの純粹道理批評の出版は千七百八十一年にありて、シロレルのロイベルも同じ年の開版なりと、されば思想海の事を觀測するものは此の年を以て其の標準を立て之を記憶すべき時となせりと、思ふに此の兩者は十九世紀の傾向を明らかに顯はしたるものなり、一つは即ち其の反省的内觀的の側面を示し、一つは平民的精神の發揚したるものにして共に當時より今日にまで及ぼしたる勢力なり。之を英國の文學に徴するに彼のエリサベツ王朝に於ける詩歌は概ね直覺的にして、其の自然の如き飛躍活動して自然其のまゝの姿を出し、戀を歌ひしものと雖も其の湧くが如き熱情は之に觸るゝものを燒き盡さずんば止まざるの勢あり、恰もわが萬葉に於ける自然と戀とが少しばかりも蔽はるゝ處なく。其のまゝに顯れて熱情の燃ゆるが如

きあると異ならず、然れども近代の詩歌に於ける自然は自づから異なる處あり、當時の詩人多くは人事の常ならず社會制度の腐敗したるを厭ふの餘り歸りて自然に訴へたるものなれば従て一種の色を帯びたるは免れざる處ありき、彼等自然に歸れど叫べども、其の歸れと言ふ處實に自然にのみ満足する能はざるを示すにあらざるや。此の時に於ては戀と云ふ事も古の如く一とすじのものにあらずして、概ね社會的の事物と連關し、彼の自然と同じく人世を避けて戀の内は免れ、こゝに其の哀感を訴へたるものあり、此れ等の思想の傾向はもとより醇なるものにあらずと雖ども、思潮發展の際に於ては已むべからざりし道程たりしならん、若し夫れ此の暗流に乗じ其の荆棘

を開きて彼岸に達せしものは幸なる哉、其の人果して幾何かある、
 アノルト古諺をかりて曰く、召さるゝものは多く撰ばるゝものは少しと。

之を要するに當時に於ける人心の傾向は二種に分つべし、一つは内觀的反省的の方向にして、爲めに懷疑の趣をなし、殆んど凡ての詩人をして哀觀の調を歌はしめたり、他は民政主義にして、其の制度に反抗したるの氣焰は痛烈なる詩調となり、社會の方面に於ては一斑の政治に民政の異彩を放たしめたり。當時の思潮其の純正なる文學よりすれば必らずしも完からざるものありと雖も、其の十九世紀の新哲學と新科學と新宗教とを導き、民政の基礎を置きたる其の偉

績に至りてはわれ等之を欽慕せざるを得んや、其の潮流に沈みたる
 幾多々恨の詩人われ等之を憐れまざるを得んや、彼等は蓋し彈丸硝
 雨の内に刀折れ丸盡きて屍を戦野に曝したるものにあらずや

此の時よりアイスランド、及びケルト文學の研究漸く盛にして、ス
 カンデナビアの文學は千八百十四年ノールウエーの獨立より愈々其
 の勢を得たり、此れ等は近代の思潮を論ずるものゝ知らざるべから
 ざるものなれども暫く之を措かん、佛蘭西に於けるユムトの哲學英
 國に於ける功利主義の哲學も。亦混亂時代の潮流と親き關係あるも
 のなれども、其の特殊の研究を爲し得るの日を待たん。

今や吾等は十九世紀の終末に立てり、十八世紀より十九世紀に亘れ

る此の思潮混亂の時代は既に過去の歴史となれり、彼の暗流は此の
 複雑したる時代と共に容易に滅するものにあらずして、多く今日の
 思想家の心を亂し、或は希臘に入り或は希伯來を味ひ、北に向ひ南
 に趨き多少の懷疑を人心に印しつゝありと雖も、今日は又自から今
 日の潮流ありて彼の暗流時代を繰り返すべきにあらず、ロセッチ、ス
 井ンバルン、モリス、クロー、ワットソン等の遊びつゝある想海は狂
 瀾靜波相交りて別に其の優雅なる天地を有す、若し夫れ古典の考究
 に至りては愈々細心なる批評に入れり、今日西歐文學を味はんとす
 るものは實に今日の如何なる時代あるかを知らざれば危し、吾人が
 研究の地は難くして且つ廣し、印度波斯の異郷は暫らく措くも少く

とも上は、アリアン人種の起原に登り、希臘希伯來の昔より漸くラテン伊太利の思潮に入り、下は近世に於ける西歐各國の文學に亘らざるべからず、近世思潮の研究はやがて世界文學の研究を促す、われ等の前途猶遠し、須らく進むへし豈に踟躇として自己の小天地に退隱すべけんや。

吾人は今近代西歐文學の由來を叙するに余りに多くの時を費せり。然れどもこれまた己むべからざるものあるなり。今日の日本文學はまた常に西歐文學と交渉せり。かれの思想は著しくわか國民の心を左右せり。今のわか文學が如何なるものなるかを明らかにし、其の前途を考へんと欲するものい、必らず近代の西歐文學を知らざるべ

からず。近代の西歐文學を知らんと欲せば、また其の由て來る處を明らかにせざるべからず、而して特に十九世紀の文學を知らざるべからず、十九世紀英獨詩人の名が、時に刊行の出版物に紹介されつゝあるは、また其の勢力の甚しきを見るに足るにあらずや。然りわが國民の性情と十九世紀初代の思想とは、或る点に於て甚しく類するものあり。これ吾人が近代西歐文學の大勢を叙するに、意外に多くの力を費したる所以なりとす。

第六章

日本文學の特質

前章既に東洋の思想を見たり、西歐の思想を論じたり、近代歐洲文學の大勢を叙したり。これより最後に日本文學に就て一言する所なるべからず。わが國民は今や東西兩洋の思想を調和し、わが特質を發揮して、新時代の日本文學を起さるべからず。

わが國民は婦女的なり。わが文學は女性的なり。萬葉時代のやゝ勇健なるものを外にしては大方纖弱あり。わが文士は概ね花に笑ひ、月に悲めり、左れば吾人は王朝の文學に於て宮殿に優遊する公卿を見たり。徳川時代の文學に於て、遊里に放蕩する中等民族の状態を

崇嚴華麗ある叙事詩を見たる事なし。人間の運命を歌ひたる大悲劇、かく、復雜極りなき人生を寫したる小説に接せず。凡て高、大、深等の文字を以て顯はさるべき思想は、わが國に求むべからず、然れども纖巧、優美、典麗なるものは、即ち既に盡されたりと云ふべし。

夫れ文學美術は到底女性的あり。詩神畫神樂神の凡て女性なるを以ても知らるべし。わが文學の女性的なるは悲むに足らず、恥するに足らず。いよくこれをして發達せしめ、わが文華をして煥發せしめざるべからず、然れどもこれに加ふるに、勇壯高大の思想を以てせば、其の色やいよく美にして其の香や益々香ばしからん、今後

の文學に志すもの必らず其の偉大なる思想を培養するに力めざるべからざるなり。

日○本○文○學○は○ま○た○哀○觀○に○富○め○り○。○何○事○も○こ○れ○を○迎○ふ○に○悲○み○を○以○て○せ○り○。○こ○れ○即○ち○わ○が○文○學○の○セ○ン○テ○イ○メ○ン○タ○リ○ズ○ム○な○り○。○例○へ○ば○あ○は○れ○ど○云○へ○る○語○の○如○き○、○こ○れ○到○底○他○國○語○に○譯○す○べ○か○ら○ざ○る○も○の○に○し○て○、

わが國民思想の哀觀を示して餘りある文字なり。涙は其の生命とあり。古今集の和歌既に哀觀あり。源氏物語の如き、必らずしも紫式部に哀觀ありしか否やは知るによしなしと雖も、かの篇中の人物が事々に常に涙を流して哀しみついあるは、讀む者の頗る心細く思

いて成功せるもの、大底悲劇にあらざるはなし。吾人は必らずしも、悲劇を取つてこれが作家の思想にまで及ぼさんと欲するものにあらず、然れども吾人は巢林子の作に於て、彼れが人生の悲境に同情を寄する事の甚だ多かりしを認む、これを以て推してかれが哀觀を見るべし。紫式部の如き巢林子の如き、わが尤もセンチメンタリズムを離れたる詩人にして既に然り。其の他の抒情詩人に至りては素より概ね衷觀的なり。西行の如きは尤もこの思想を顯はしたるものか。衷觀は即ち厭世思想と等し、厭世思想はわが文學に一貫して顯れたる、蓋しわが國民性情の然らしむるものあるなり、これに加る

に、わが民族の上に非常なる勢力を及ぼしたる、佛教はこの哀観を養成するに於ても亦力ありしものならん。これを今日に見るに、現今の西歐文學を味ふものい、多くはかの厭世的思想を有する詩人を愛好するの傾向あり。人生を樂める快樂歌の如きは往々輕薄として退けられ。厭世的なるものは頗る觀迎せられつゝあるが如し。過去の素養は即ち今の人心をして斯くの如くならしむるなり、吾人はまた爰に支那文學の勢力ありし事を忘るべからず。支那の文學はまた大低厭世的慷慨的なり。今や西歐文學に於てこれ等厭世的慷慨的なるものが、新たなる思想と新らたなる文字とを以て紹介され、加ふ

支那的思想を以て養はれたりし、わが思想がこれを歡迎したりしはまた怪むに足らざるなり。文學は素と理想的のものたり、故に自ら現世に對し解脱したるの思想を有し、之れを厭ふの傾あるは免るべからざる處なり。然れども現世を厭ふは既に未なり。大なる思想の現世を抱藏せざるべからず、吾人はかの厭世的哀観より一步を進めざるべからず。西歐文學に於ては、これ等厭世思想と淺薄なる樂天觀を超越せるもの多し、吾人は今の人心を養ふにこれ等超脫的文學を以てせざるべからず。佛教的支那的思想は暫らくこれを打破し、新鮮なる思想を紹介せざるべからざるあり。故に吾人は今の基督教あるものに向つて望を屬するや大なり。不幸にして今の教徒は、ま

たやうやく厭世的佛敎的に傾き、わが在來の哀觀と調和せんとするの傾あり。甚しきは走つて禪に趣ぎ。之を以てまた心身鍛鍊の法と爲すに至れり。禪の如きは既に過去のものたり、吾人は開明の今日斯くの如き修養法に重きを置くを悲む。殊に新思想を以て立つべき基督教徒のこれに心を傾くるあるを悲む。基督教にして其の立脚地を確守し、大ひにわが文界に活歩するあらんには、またわが想界を革新するに容易ならん。夫れこの宗教が今日の歐洲文學を建つるに於て如何の力ありしか。今日かれが高遠莊大の思想を有するは、大底其の原因をこの宗教に歸せざるべからず。わが文學の自然に付ては、既に論ずる處ありき。これ又わが文學の

特色にして、大ひに發達進暢すへきものなり。古の歌集を見よ、先づこれを分つに春夏秋冬なる自然の顯象を以てし、其の題目はた凡て自然界の事物を以てす。自然の詩趣は盡くしがたし。其の源泉は滾々として盡さず、其の趣味はたへず新なり。吾人若し新思想を以てこれに對する時、自然は必らず其の新らたある姿を以て顯はるなり。吾人は曩きに言へり、わが文學は地の思想に富めり。これ實にわが特色なり。徳川時代に於ては俳諧既に自然に對する詩人の範圍を廣ふせり。明治の文學は夫れ何を以てかわが自然觀に貢獻せんとするか。吾人は今日の文界未だ新らしき自然の聲に接せず、漸く一二成功したる小説家に於て、はた新體詩家に於てこれを見たり。

然れども未だ全然自然を味ひし人ありしを聞かず。かの今日所謂自然詩人なるものは吾人の重きを置く處にあらず。吾人はこの自然觀に於てもかの西教の勢力に望を置くものあり。

吾人はわが文學に理想詩人のあらざりし事を悲む。こゝに理想詩人と云ふは、靈界の消息を傳ふるの詩人を云ふ、西行の如きは以て理想詩人と云ふべきか、而も未だ以て大なる理想詩人として誇るに足らざるものなり、これ素よりわが國民の性質と其の素養との致す所なれば、吾人はこれを嘲つ事能はざるも、將來に於てこれを求むるは、必らずしも理なき事にあらざるべし、理想的眼光は尤もわが國民の欠乏せし處にして、今日尤も要すべき處にあらざるか。人生

に對し自然に向ひ、新らたなる思想を以て、これを觀察せんとには必らずや、理想的の眼光を以てせざるべからざるにあらざるか。吾人は今日に於て理想詩人の出でん事を切望す。不幸にして今日の世運は大方理想詩人を埋没し去れり、明治の文壇は實に二三の理想詩人を有せりき。然れども彼等は未だ充分なる發達を爲す能はざりき或るものは仆れたり或るものは詩界を去れり。或るものは其の傾向を一變せり。今日は僅かに其の遺墨を見るのみ。ア、理想詩人何れの日にか出づべき。

吾人は斯く論じ來つて頗る日本文學を貶し西歐文學を揚げたるの感あり。思ふに日本文學はこれを西歐の文學に比するに頗る幼稚なり

未だかれと併び難し。吾人は敢て諂辭を呈するを好まず。欠所は欠所あり、これを補ふにかれの長所を以てし、以てわが文華をして燦爛たらしめんと欲す、吾人豈に猥りに自から侮らんや。大ひにわが文學をして開發せしめんと欲すればなり。暫らくこゝに島國的狹隘なる思想を去り、洪量なる心を以て東西の文學を咀嚼せんかな。

明治三十年二月廿六日印刷

(定價拾五錢)

明治三十年三月一日發行

東京市麴町區飯田町三丁目八番地

編輯兼發行者 井口基二

東京市神田區今川小路貳丁目壹番地

印刷者 眞形重五郎

東京市神田區今川小路二丁目壹番地

印刷所 眞形活版所

東京市麴町區飯田町三丁目八番地

發行所 文學普及會

東京市神田區表神保町

大賣捌所 東京堂

文學普及會設立の趣旨

文學者と共に文學を談じ、歴史家と共に歴史を究むるは當然の事なれども、本會の特別なる主意は、文學者の外に文學を談するの友を求め歴史家の外に歴史を嗜む所の人を尋ねて、與に共にその趣味を解せんとするにあるものなれば、本會は寧ろ學者の會員を得んよりは、一般普通の有志家を會員に得ん事を欲するものあり、即ち世に所謂平民的文學會とは本會の事なり、乞ふ世の志あらん人は來りて本會の志を贊助せられん事を。

文學普及會々則摘要

第一條 本會は主として文學の發達及び普及を圖るを目的となし古今内外の文學的材料を蒐集し之を出版して廣く天下に發表するにあり且歴史は極めて密接の關係あるか故に併せて之をも研究せんと欲す

第二條 本會の目的を達せんか爲に文學部歴史部と分ちて順次に出

版を公す

第三條 何人とも雖も本會の會員たるを得べし

第四條 本會々員は會費半ヶ年分金廿五錢一ヶ年分金五十錢とす一回若くは二回に收むへし

但地方會員は會費前納の上別に毎回郵税二錢を要す

第五條 本會の出版は毎年四回發行して會員に頒布す會員外には一冊定價十五錢にて頒賣す

東京市麹町區飯田町三丁目八番地

文學普及會事務所

廣池千九郎著

皇室野史

全一冊英本

定價十四錢郵税二錢

右は應仁乱後に於ける皇室御衰替の状并に徳川時代に於ける皇室の御様を先年新に發見せる數多の舊記秘録より調査して編成せる古今未嘗有の珍書なり望の者は本會事務所迄御申込あらば直に送本すべし

版を爲す

第三條 何人とも雖も本會の會員たるを得べし

第四條 本會々員は會費半ヶ年分金廿五錢一ヶ年分金五十錢とす一回若くは二回に收むへし

但地方會員は會費前納の上別に毎回郵税二錢を要す

第五條 本會の出版は毎年四回發行して會員に頒布す會員外には一冊定價十五錢にて頒賣す

東京市麹町區飯田町三丁目八番地

文學普及會事務所

廣池千九郎著

皇室野史

全一冊英本

定價十四錢郵税二錢

右は應仁乱後に於ける皇室御衰替の狀并に徳川時代に於ける皇室の御様を先年新に發見せる數多の舊記秘録より調査して編成せる古今未曾有の珍書なり望の者は本會事務所迄御申込あらば直に送本すべし

廣南著

在原業平

全一冊(肖像挿入)

三月中出版

(本書自序)

相○武○天○皇○平○安○遷○都○の○事○は○三○の○御○代○を○經○
皇○室○漸○く○衰○へ○て○藤○原○氏○の○威○權○次○第○に○朝○野○
を○風○靡○す○る○に○當○り○て○金○枝○玉○葉○名○門○巨○族○
多○く○世○に○沈○倫○せ○り○る○の○書○の○主○人○公○の○如○き○
亦○其○一○人○な○り○而○し○て○公○は○門○閥○高○く○交○
原○流○は○亦○其○一○人○な○り○而○し○て○公○は○門○閥○高○く○交○

を好み風流を旨とせむが如く。其又世を慨
時を憤りしむの如し。故に後世の人敢て
これを見倣するとは能はず。予嘗てその事
蹟を査して。稍得たる所あり。よつてこの
予が最も親愛なる文學普及會の爲に。その
一代記をものしめて。江湖の才子に問ふこと
解り。

五 現業平

三三九 中 著者しるす
全一 世(會)著者しるす

71
74

11-17-0

084807-000-9

71-74

文学概論

文学普及会

M30

DBA-0152



